

平成31年度 東京都立農産高等学校（全日制課程）学校経営報告

校長 伊達崎 広

I 平成31年度の取組と自己評価

1 学習指導の充実

（1）普通教科、専門教科の授業の充実

【今年度の取組目標と方策】

- ①授業規律を徹底し、授業に集中させることで基礎学力を定着させる。
- ②言語活動の充実を推進し、言語能力の向上を図る。
- ③教育のICT化を推進し、学習指導、情報活用等において効果的な取り組みを行う。
- ④複数のデータや情報を統合して考える場面を設定し、分析力、論理的思考、判断力を高める。
- ⑤考查問題を共通問題とする。
- ⑥生徒の学習支援の充実

【取組と自己評価】

学校評価の質問「生徒がわかりやすいように、教え方や説明を工夫している」において84%の生徒が肯定的回答となっており、学習指導について一定の成果がみられた。しかし、「自ら広く様々なことを学ぼうとしている(学んでいる)」では、否定的回答が37%に達しており、生徒の興味関心をより一層高め、学びに向かう姿勢を育てていく必要がある。

2学期より、定期考査前に学びの場としてアイリスカフェを設置し、外部指導による学習支援を行った。合計13日間の実施で、のべ80名が利用した。参加者には成績上位者もあり、生徒間で教えあう姿も見られた。校内に学習ニーズのあることが確認できたので、来年度も継続する。

（2）系統的な専門教科学習の推進

【今年度の取組目標と方策】

- ①グランドデザイン作成の過程をととして、各科の育てる生徒像、身に付けさせる力を明確にし、農業に関する知識・技能を確実に習得させる。
- ②資格試験の指導を計画的に行い、卒業までに生徒一人一資格以上の取得を奨励する。
- ③農業生産工程管理（GAP）やHACCP等の教育をととして、農業における国際基準となる安心安全への理解を深める。
- ④農業教育をととして、オリンピック・パラリンピック教育を推進する
- ⑤農業の6次産業化にともなう実践的経営学習を導入し推進する。

【取組と自己評価】

日本農業技術検定2級合格1名、日本農業技術検3級合格率82%であり、アグリマイスター顕彰制度では、金1名、銀4名であった。造園技能士合格者は2級1名、3級16名、フラワー装飾技能士3級は12名、食品衛生責任者は41名が合格した。

GAPは、6月にサトイモ、トマト、ねぎの3品種でJGAPの認証を受け、12月には継続のための審査を受けた。HACCPについては、HACCP教育を食品科のすべての科目で取り入れ、整理整頓とともに安全衛生管理の徹底を進めている。

資格試験の合格率は高い割合にあるといえるが、今後は受検者数も増加させていく必要がある。製造環境の整理整頓や安全衛生管理については、特に記録の取り方について、作業現場の実態に合わせて工夫改善が求められる。GAPやHACCPに関する授業を年間計画に位置付けて実施していく必要がある。

学校評価アンケートの質問「実験、実習を重視した体験的な学習によって、専門分野に対する興味・関心が高まる」に対して91%の生徒が肯定的回答をしている。専門科目の実験、実習が生徒の興味・関心

を高めていると言える。今後も、実験、実習により生徒の関心・意欲を高め、それを学習意欲へとつないでいく指導を推進する。

(3) 授業力の向上

【今年度の取組目標と方策】

- ア 主体的、対話的で深い学びを実現するため、授業研究を計画的に実施して授業力向上を図る。
- イ 生徒の分かった・できたを大切にする授業、生徒がさらに勉強したくなる授業づくりを推進する。
- ウ 全教員が授業評価を実施し、授業改善をすすめる。

【取組と自己評価】

授業観察の結果、ほぼすべての授業において、授業規律は徹底できている。ICTを活用した授業づくりも若手教員を中心に定着している。今年度は、生徒に考えさせる質問や主体的学習場面の設定をテーマとして、研究授業、研究協議を研修部中心に年間36回以上実施した。全日制と定時制間の授業見学も複数回実施している。研究授業、研究協議の成果は、研究紀要にまとめ発行する。

学校評価アンケートにおいては、質問「生徒がわかりやすいように、教え方や説明を工夫している」に対する教員の回答は97%が肯定的な回答であり、質問「生徒がわかりやすいように、教え方や説明を工夫している」に対する生徒の回答は84%が肯定的な回答となっている。このことから、「生徒の分かった・できたを大切にする授業」について、概ね達成できているとすることができる。しかし、質問「自ら広く様々なことを学ぼうとしている(学んでいる)」に対する生徒の肯定的な回答は62%にとどまっており、「生徒がさらに勉強したくなる授業づくり」については、さらなる工夫が求められる。

生徒による授業評価については、取組に差があった。若手を中心に授業評価の結果を授業改善に生かしている教員もいるので、成果を共有してより良い授業づくりを全体的な取組としていく必要がある。

2 生活指導の充実

(1) 基本的生活習慣の定着

【今年度の取組目標と方策】

- ① 生徒の状況を学校全体で共有し、必要な指導を全教職員が共通理解のもとに行う。
- ② 生徒の心を育てる生活指導により、自分を大切にするとともに他者を大切にすることを育む。
- ③ 登校時のあいさつ運動等、教職員が率先垂範して挨拶を行い、挨拶する習慣を身に付けさせる。
- ④ 儀式的行事や全校集会等におけるガイダンス機能を充実させる。

【取組と自己評価】

生徒状況の把握については、朝の打合せや拡大生徒指導部会により、一定の水準でなされている。登校時の挨拶運動は、年間を通して校門で行った。生徒の参加もあり、自ら挨拶することができる生徒も増えてきている。始業式、終業式、全校集会等については、次第を調整して、話す内容を一定程度整理することができた。次年度は、さらに内容を調整し、計画的に実施できるようにしていく。

(2) 規範意識の涵養

【今年度の取組目標と方策】

- ① 授業の開始時、終了時は礼を行う。
- ② 授業の定刻開始や遅刻者に対する個に応じた粘り強い指導等により、遅刻させない学校風土をつくる。
- ③ 時と場合に応じた身だしなみを整える指導を徹底する。
- ④ 体罰の根絶といじめの未然防止、早期発見、早期対応等、人権に十分配慮した教育活動を行う。

【取組と自己評価】

授業規律は、ほぼ良好な状態である。遅刻に関しては概ね良好な状態であると言えるが、一部の生徒の遅刻が大変に多くなっている現状がある。遅刻する生徒に対しては段階的な指導を行っているが、次年度はより組織的な進行管理を行い、指導を徹底する必要がある。

学校評価アンケートでは、質問「あいさつや服装の指導は適切である」に対して、23%の生徒が否定的回答をしている。このことから、生徒が指導内容をよりよく理解できるようにするため、わかりやすく丁寧な説明をしていく必要がある。

質問「先生方は、授業中や学校生活の中で、体罰の防止や生徒の健康管理に配慮した指導を行っている」には83%の生徒が肯定的回答をしている。また、体罰実態調査においても、体罰や行き過ぎた指

導に関する報告はない。今後も定期的に体罰防止の取組を進めていく。

(3) 安全教育の推進

【今年度の取組目標と方策】

- ① 非行や誘惑に巻き込まれない自己管理（危険回避）を指導する。
- ② 防災活動や防災訓練を通じて、災害時の対応方法について学習させる。
- ③ 地域や消防署と連携した防災訓練により、自助・共助を正しく理解して行動できるよう指導する。
- ④ 警察や消防署、児童相談所等、関係機関と連携した安全教育を実施する。

【取組と自己評価】

セーフティー教室(7/8、7/11)、健康教室(7/16、12/12)、マナー教室(12/16)等により、自己管理や危険回避について学んだ。健康教室では地域の保健センターより保健師を講師として招き、専門的見地を交えながらも生徒にわかりやすいお話をいただいた。

防災に関しては、宿泊防災訓練(5/31)、避難訓練(7/12、12/12、3/19(中止))、防災講話(9/2)等により、生徒の意識を高める教育活動を行った。宿泊防災訓練や避難訓練において、消防署や消防団の方々にご協力をいただき、実践的な訓練を行うことができた。また、1年生全員が救急救命講習を受講している。

3 進路指導の充実

(1) キャリア教育の充実

【今年度の取組目標と方策】

- ① 農業の専門高校としての計画的なキャリア教育により、農業に対する志を高める。
- ② 園芸や食品等の農業分野に関する進路情報を幅広く収集し、的確に伝える。
- ③ 北海道酪農体験・農家実習等の農業インターンシップ等を実施して、農業に関連する分野への進学や就職者を増やす。

【取組と自己評価】

卒業生135名中、就職47名(35%)、進学81名(60%)、その他7名(5%)であった。進学のうち57名が専門学校であり、四年制大学は17名、短期大学は7名であった。キャリア教育は、全体として組織的、計画的に実施されている。生徒への質問「将来のことについて参考になるホームルームや進路行事を実施している」において76%が肯定的回答をしていることから概ね良好であると言えるが、否定的回答も25%に上るため、なお一層の工夫や改善を行いたい。

就職者のうち農園、造園、食品製造、調理等の農業関連分野を進路選択した者は、就職81%、専門学校40%、大学・短大58%で、全体としては約半数(55%)であった。本校の生徒の進路希望は多様であり、一人一人の進路をより良く実現する進路指導を実施してきた。今後もこの方針を継続しながら、専門学科での学びを生かした進路選択について情報を提供し、考えさせる指導を行っていく。また、現在、農家の継承者問題が深刻になっており、次世代の担い手の育成が求められている。本校においても、就農に関する情報提供を綿密にして、就農を目指す生徒を支援していく。

インターンシップは、北海道酪農体験7名、葛飾区のブルーベリー農家での体験2名であった。インターンシップ参加者からは、参加してよかったという声が聞かれ、複数の卒業生が酪農への就業を目指して就職や進学をしている。来年度以降も生徒の自主的な進路選択を支援するために、インターンシップを組織的に推進していく必要がある。

(2) 個に応じた進路指導の推進

【今年度の取組目標と方策】

- ① 生徒一人一人の個に応じた進路指導をより一層推進し、生徒の第一希望の進路実現を追求する。
- ② 上級学校、企業訪問等、情報収集を徹底して行い、進路先が求める生徒像等への理解を深める。
- ③ 生徒の進路希望や個性と進路先とのマッチングの視点からも進路情報の提供を行う。
- ④ 奨学金について、適切に情報提供を行う。

【取組と自己評価】

学校評価アンケートでは、保護者への質問「子どもの進路指導については、熱心に指導してくれている」に対して肯定的回答が85%であり、一定の成果を上げていると言える。しかし、生徒への「進路に

ついて知りたいことがすぐわかるようになっている。進路関連の情報が入手しやすい環境である」「先生方は、進路や学校生活などの（悩みごと、いじめなど）相談に対応してくれている」に対して、2割強の生徒が否定的に回答しており、さらなる改善を進めていく必要がある。

4 特別活動の充実

【今年度の取組目標と方策】

- ①ホームルーム年間指導計画に基づき、学習支援、進路指導・キャリア教育、学校行事等に計画的、系統的に取り組む。
- ②農業クラブ活動を推進する。
- ③国際理解教育を推進する
- ④生徒の自主的な活動を支援して、部活動を活性化する。

【取組と自己評価】

農業クラブ活動については、令和元年度学校農業クラブ全国大会の農業鑑定競技において、生徒1名が優秀賞を受賞した。また、部活動等では、醸造部や応用微生物部を中心にした味噌の研究や1年生有志によるムジナ藻の研究も進んでいる。

しかし、学校評価アンケートでは、生徒への質問①「部活動は、放課後の有意義な活動となっている（活発である）」、②「農業クラブ活動は、活発に活動している」、③「生徒会は、活発に活動している」への肯定的回答はそれぞれ①65%、②72%、③67%に留まっている。

このことは、生徒の自主的な活動への支援が一部の生徒や活動に限定されている可能性を示唆している。部活動、農業クラブ活動、生徒会活動は、生徒の自主的な活動の場として重要な意味をもつものであるので、今後、生徒の自主的な活動に対して、予算や発表の場の提供等により支援することにより、生徒の活動全般を活性化していきたい。

5 心と身体の健康の増進

（１）生徒の心を育てる教育の推進

【今年度の取組目標と方策】

- ①教育相談機能をより一層高め、多様な生徒へ適切な対応を行う。
- ②実習・実験他、様々な活動における成功体験をとおして、生徒の自己肯定感を向上させ、心の安定を図る指導を推進する。
- ③農業の特性を生かし、目標に向かって努力することの大切さを伝え、あきらめずに最後までやり抜く心を育てる。

【取組と自己評価】

今年度、各学年に特別支援教育コーディネータを1名ずつ指名し、養護教諭とコーディネータによる教育相談委員会を7月より隔週定例開催した。教育相談委員会では、生徒情報を共有し、特に支援の必要な生徒については、支援の方向性について協議を行った。また、特に外部との連携が必要な事例については、ユースソーシャルワーカー（以下、YSW）の派遣を受けてケース会議を開催した。引き続き対応中の課題もあるが、支援の方向性が明確となり、外部機関との連携も円滑に行うことができるようになった。来年度は、YSWの継続派遣を受け、様々な生徒の個に応じた支援を推進していきたい。

（２）生命尊重の教育の推進

【今年度の取組目標と方策】

- ①命の大切さについて、日常的に指導する。
- ②ホームルーム等において、自他の生命や人格を尊重する態度をはぐくむ指導をより一層充実させる。
- ③農業の専門高校として、実習・実験等において生命尊重の視点から指導を行う。

【取組と自己評価】

今年度前半、友人間で相手の気持ちを考えない発言や行動があり、数件の特別指導を行った。生徒の心情を聞き取り、生徒に考えさせ、反省を促す丁寧な指導を行って、生徒の発言や行動に変容を見ることができた。生命尊重の教育は折に触れて行っている。来年度は、より一層、組織的、計画的に生命尊重や人権尊重の教育を推進し、継続的に生徒の心を育て教育に取り組んでいく。

6 地域連携、地域貢献活動の推進

【今年度の取組目標と方策】

- ① 日常の学習活動を活かした地域貢献活動を推進する。地域貢献活動をととした探究活動を行い、その学習成果を発表する。地域への貢献をととして、自己有用感を高める。
- ② 教科「人間と社会」や農業科目において、自治体や地域の各種団体との連携した活動に取り組む。
- ③ 小・中学生、地域住民対象の体験講座等を実施し地域貢献活動を推進する。

【取組と自己評価】

例年とおり、5月の菖蒲まつり、亀参まつりでの生產品の販売、6月の曳舟川親水公園の花壇づくり、7月の水元公園土手のアジサイの植栽管理、10月の葛飾区産業フェアでの生產品販売、11月の荒川区江戸東京野菜継承事業への協力、日暮里マルシェでの三河島菜の販売等、地域からの要請に応じて多くの地域連携を行ってきた。来年度はこれらの活動に加えて、近隣の公園、児童館、小学校との連携も進めていく予定である。

7 学校経営

【今年度の取組目標と方策】

- ① 施設・設備の維持、補修、更新を計画的に進め、生徒の学習環境の整備に努める。
- ② 自律経営予算を効率的に執行し、予算残をなくす。センター執行率50%を目指す。
- ③ 行事等、実施の目的を明らかにし、学校全体の取組として推進する。
- ④ 農産高校学カスタンダード及び技能スタンダードに基づく教科指導を組織的・計画的に実施する。
- ⑤ 施設共有や行事交流等、全定の交流を推進する。
- ⑥ 組織マネジメントと学びあう組織文化により、継続的に発展できる組織運営を行う。

【取組と自己評価】

廃棄物の総量把握を行ったので、今後、中長期廃棄計画を策定する。生徒・教員が使用する什器類は老朽化が目立つため、中長期の更新計画を策定した。また、備品や施設・設備についても更新計画を作成して、計画的に更新していく必要がある。

センター執行率は、予算全体で56%であった。

今年度の学校運営は、組織的に行うことができた。来年度もこれを継続するとともに、HP委員会、教育課程検討委員会等の校内組織を活用して、より組織的・計画的な運営ができるよう努力していきたい。